

古民家改修 物語

その2 〈完結編〉
—未来への扉—

Kazue Kota

作庭家 甲田 和恵

完成した京町家の玄関



● 辿るはずだった時間

“これはのぞんでいた未来”

“そして叶わなかつた未来”

手と手を取り合ふ、着物をまとつた万国の女性たち。

それぞれの国の象徴を宿し、心をこめて作られた着物。

ふるさとに包まれ誇らしげで、彼女たちの穏やかな微笑みは互いへの慈しみに満ちていた。
生か死かの戦いを起源とするオリンピックを一瞬でも真の平和へと転換できたかもしれない。

「KIMONO プロジェクト」
<https://rakukatsu.jp/kimono-project-introduction-20201201/>

それはこの時代には絵空事だったのだろうか。

2021年東京オリンピックで、このプロジェクトは実現しなかつた。

私の胸の内、奥深くから叫びのように入み上げてくる“何か”は胸を痛く締め付け、遂に頬をつたつた。

止まない涙だつた。

2020年冬、京都。

解体の終わった古屋は失われた時、本来^{たゞ}辿るはずだった時が再び刻まれるのを待ちわびていた。しかし、そのためには私たち夫婦がその記憶と心を取り戻さねばならなかつた。

“この国がいかなる国なのか”

“日本民族とはいかなる民族だつたのか”

それは決して形骸的なものではなく、連綿と繋がってきた“何か”である。

彼らは戦後第三世代。

自然、歴史、文化、食べ物、家、服、政治、経済、人との繋がり……。生活の全てにおいて、もはや絆^{たゞ}は切断され、縛糸である自身の持

つ本来の生命力、そして心までもが失われつつある。

ふと気がつくとなんと心許ない…。

…。

一

果てしない寂しさが響く。

何を手掛けかりに再び思い出せるのだろうか。

眼前に佇む古屋の大黒柱、土壁、漂う空気、陰影、そして自分の中の遺伝子に刻まれて

いるであろう微かな感覚、そして懐かしさを辿るより他無かつた。



建築前の陰影

二

● 炭と鉱物を埋める

店員さんの怪しげな目線に夫はビクビクしていた。

私たちの0-1テストは完璧ではなかつた。

講義も指導も受けたわけでもなく、気がつけばやつていた。

いや頼るものが他に無かつただけなのだ。

それで長い長い設定文をその都度唱えていた。

狭い鉱物店の中、他のお客様もいて店員さんもいる中で何度も何度も、唱えては0-1、唱えては0-1、を繰り返していた。

いよいよ空気が重くなつてきた頃ようやく全てのテストが終わり、色々なものから解放された。

夕方の来店から、すっかり夜になつていた。

ハーキマーダイヤモンド、月の石、隕石、水晶数種、シュンガイト、ラリマーなど原石は30種類以上、そして一二三糖、七五三塩、マハ

作業は炭と鉱物を土に埋める作業から始まり、家の設計、工法、取り扱う材料、建築資材、配管、水道、照明設備と建具探し、全て自分たちの手と足で行なつた。

一つの家を建てるのに考えることは沢山あつた。

全ての計画も作業も0-1^{ゼロワン}テストで導き出した。

私たちの心が目覚めるように。

まほろばだより No.5440 22-071 5/6 2



土に入れた石や塩



炭と鉱物

ファーラ、フランキ
ンセス、溶岩石、備
長炭、活性炭あちこ
ちから仕入れた。
翌朝揃った材料を
並べ、予め出してお
いた位置と穴の大き
さ、深さを元に二人
の奮闘作業が始まっ
た。
張り詰めた空気、
初めての作業にも関
わらず不思議と違和
感は無かつた。

土間に整地、炭埋作業で出土した土
は合計10トン以上。
全て二人の手作業でトラックに
積み込んだ。

●生命力のある木材

日本の風土に生まれた木、生命力のある木。

贅沢でも何でもない。

本来自然そのものである自分たちの体、いのちと真剣に向き合ったかつた。

心も体も、見えないエネルギー
体も含めて、生き生きとする“場”
を作りたかったのだ。
しかし、かつての当たり前は、
今のは希少。なかなか納得のいく材
木が見つからなかつた。

搜索は数日間続き、ようやく0—
1テストも十と示す、代々続く一
軒の材木屋さんにたどり着いた。

ファーラ、フランキ
ンセス、溶岩石、備
長炭、活性炭あちこ
ちから仕入れた。

翌朝揃った材料を

並べ、予め出してお
いた位置と穴の大き
さ、深さを元に二人
の奮闘作業が始まっ
た。

張り詰めた空気、
初めての作業にも関
わらず不思議と違和
感は無かつた。

土間に整地、炭埋作業で出土した土
は合計10トン以上。
全て二人の手作業でトラックに
積み込んだ。

石と炭の代わりに60体近くの土
のう袋がビッシリになつた。
作業が終わつたのは3日後だつ
た。

石と炭の代わりに60体近くの土
のう袋がビッシリになつた。
作業が終わつたのは3日後だつ
た。

はじめにどの穴から、何を埋
めるか、どのくらいの量を入れる
のか、石の並べ方、埋め戻しの方
法は…。

方位や地形など頭には入れてい
たが詳しいことは0—1に全てを
委ねる。

方位や地形など頭には入れてい
たが詳しいことは0—1に全てを
委ねる。

方位や地形など頭には入れてい
たが詳しいことは0—1に全てを
委ねる。

はじめにどの穴から、何を埋
めるか、どのくらいの量を入れる
のか、石の並べ方、埋め戻しの方
法は…。

足も腕もパンパンで節々も悲鳴
をあげていたが無我夢中だつた。

誰も知らない自分たちの取り組
み、天と地、そして自分たちだけ
が知っている。

誰も知らない自分たちの取り組
み、天と地、そして自分たちだけ
が知っている。

はじめにどの穴から、何を埋
めるか、どのくらいの量を入れる
のか、石の並べ方、埋め戻しの方
法は…。

足も腕もパンパンで節々も悲鳴
をあげていたが無我夢中だつた。

誰も知らない自分たちの取り組
み、天と地、そして自分たちだけ
が知っている。

誰も知らない自分たちの取り組
み、天と地、そして自分たちだけ
が知っている。

神域である照葉樹林の深い山と夫婦岩に近い古の海に挟まれた三重県伊勢市二見町松下。

力強い木の匂いに包まれながら、海風に私たちは吹かれた。

自然の風に晒され、太陽を浴び、丁寧に製材され、我が子を愛でるように、父母をいたわるかのように、静かな暗いところに木材は寝かせられていた。

尾鷲、田辺、木曽……産地はどこも水の清らかな水源地。立ち木として生きていた時も力強い大自然に育まれ、大切に加工されたのだろう。

木材の表面が見たことない虹色の光で語りかけてくる。自分よりもはるかに年を重ねた木の重厚で清らかな匂いからは、深山のせせらぎ、鳥のさえずり、漂う靈感を私たちに伝える。

「生きている」
木の精を初めて眼にした。



三重の木材店

四

「なぜ、二十年ごとに建て替えるとならんのや、不経済じやないのかとか言う人がおったんですね。それが衰えてくるわけです。

建て替えると木が本来持つるものも清新になりますわ。それで自然と頭が下がるんじやないです。

か。

いや、自然そのものに打たれて頭を下げさせるような、精神性のあるものを作らないとあかんのです。

昭和六十年に伊勢神宮のお茶室を建築した数奇屋大工・中村外二棟梁。

木曽ヒノキは自然林で長い長い時の中、大自然のエネルギーを吸い込み、ゆっくりと成長し育つ。全ての木に精が宿るわけではない。森の中でも“母なる木”として他の生き物たちの命を支え、生きる叡智を授けてくれる木だ。今、母なる木が日本にどれだけ残っているだろうか。

そして母なる木が育つ風土が残っているのだろうか。

自然が心を映す鏡のように思えた。

五

●竹小舞

竹の長さを揃えて切る。

差し込みを小刀で削る。

縦に差し並べ、上から縄でからげてゆく。

螺旋に螺旋にぐるぐると。

初めてなのに込み上げる懐かしさ、竹と縄と刀の単純な作業は、深く教わるでもなく、こうやるんだ！と言わんばかりに指先が勝手に動く。

結びの始まりと終わりの縄始末、結束の仕方、どんどん泉のようにやり方が湧いてくる。

ああ、この作業はしたことあるんだ。

生まれて初めての小舞づくりは

私の記憶の種に水を与えたようだ。一枚、また一枚と小舞の完成が

早くなつてゆく。

「知つてゐるか？昔、小舞編みは子供の遊びだったたのよ」

突然、植木屋の修行を始めたばかりの頃に出会つた当時70代の棟梁を思い出した

「昔はサ一、家づくりはみんなでやつたのよ。

あるもん全部使つてよ。

木、切り出してよー。

客も職人もそんなん無かつたよ。

年寄りも、ちっこい子供だつて遊びで手伝つたくらいだから。

今はなんでも金で誰かに頼む。もつたいねーよな、自分でやる方がいい家になるんだからよ。

なんでも自分たちでやつたのに、

今の人、知恵も力もねーよ。」



小舞編み

20歳もいかない頃だった、学生からすぐ庭修行に入った。棟梁の言う通り何も出来なかつた。

名前もすぐには覚えられなかつた。

しかし、ほとんどう昔から形が変わらない道具と手で土に触れていたこと、自然に触れていることでいつも心は不思議な安心感で満たされていた。

七

●発酵、土の蘇生

解体で出た古い壁土。

50袋以上、いやもつとあるぞ。

0-1はマイナスと出る。

試しに水を混ぜて練つてみると粘りが全くない。

新しい壁土の流通はほとんど無いし、そもそも庭に積み上げられたこの土嚢の山。

これ、どーするねん！！

何とかして使えるようにならな

間が生み出され、生み出された庭はアンプとなり、木漏れ日や水音、木の枝葉の擦れ合う音、四季の移ろい、虫や動物たちの声を営みへと取り込んだ。

そして空、太陽、水、風、土、大自然へと、いのちの淵源へ意識を導くのだった。

あの時と似た感覚。

出来上がった小舞壁に囲まれた

空間は不思議な空氣を醸した。

私たちには新しい、けれど懐かしい空間。

地ゴテ、セットウ、左官ゴテ、ショウゼン、サンマタ、フネ、クワ、石ノミ、コヤスケ、テッペイ、ビシャン、手ぼうき……。剪定道具、土道具、石道具、左官道具、据付道具、初めて手にする道具。



階段作り



手作りの和紙照明（写真上）と完成した京町家（写真下）



それはこの時代において希望であり、私たちを支えてくれていた。それぞれの小さな手は、"日本民族の心を思い出したい" この想いに集結した。

手作りの和紙で作られる照明は簡素でありながら、自然との付き合いを重んじながら、この自然が生み出したもので、日常を心豊かに過ごして欲しい作り手の、細やかな心遣いが滲み出していた。

私たちの家改修の経緯をお伝えすると、何か深いところで感じ入つてくださったようで、照明灯具への想いと、社会の変化による価値観の変化、日常の変化を切実にお話しくださいました。

しかし、変わらずに和紙と木の照明を産み出すのは風土との繋がり、代々受け継がれてきた心を、絶やさぬよう心を、絶やさぬようにならねえよ。

そのような想いが私たちの琴線に触れ、挫けそうだった私たちに再び力を与えた。

営みから外れた伝統、その内にある心が途絶えてしまう。正に今その時を迎えている気がした。

経営を考えれば、陳列する物が変わる。

その後も0→1テストにより心ある職人たちとのご縁を賜り、それぞれに教えられ、感動しながら、2021年8月ようやく家は完成した。

●結、産
「なんでも心を込めて向き合うのよ」数年前、宮下洋子さんに言われた、一言。

この一言を大切に私たちは歩んでいた。

有名になりたいとか、大金が欲しいとか、こう思われたいとか、贅沢したいとか、そんな事はどうでもよかつた。家づくりでは心共鳴する生産者の方、職人さんたち、そして私たちを目覚めさせる自然と出会つた。

それはこの時代において希望であり、私たちを支えてくれていた。それぞれの小さな手は、"日本民族の心を思い出したい" この想いに集結した。

たくさんの心の手の “結” により一つの大きな心が形を成し、産まれたのだ。

私たち二人では決して成し得ない。

そして私が修行時代に感じた感覚と同じく、みなで作った空間は、母なる天地大自然へと意識を繋げてくれた。

産霊（むすひ）という言葉

それは自然と伴い歩んできた、我々自身の内にある“心”的力ではないかと直感した。

”大和は國のまほろばたなすく
青垣山ごもれる倭し美わし“

自然と伴い、それぞれのいのちの輝きを自身の喜びとして感じていたのだろうか。

いつか本当に真の心で手と手を取り合える日が必ずくるだろう。

本来辿るはずだった時が動き出すのだから。

古屋改修で歩んだ道、その道で

私たちが感じたこと。
辿ってきた道の先にこの北海道



木曽ヒノキの神棚

十一

●私たちの“これから”

2月中旬、福井県の敦賀港から北海道小樽港にフェリーで海を渡つた。

船の窓から覗くと遙かな天と永遠に続きそうな海が結ばれ、昇つてくる太陽は始まりの兆しのように思えた。

あの時、込み上げてきた涙は私の中にある先人たちの心だったかもしれません。

しかし、それを決意させる程のプロジェクトが北海道で始まる。

大切にしてくださる

方とのご縁をこの家は待っている。

(募集中です)

変革の時、これから如何になるか、正に“聞”。
真と偽の混じる世に、生きる

導”は自身の内にある。

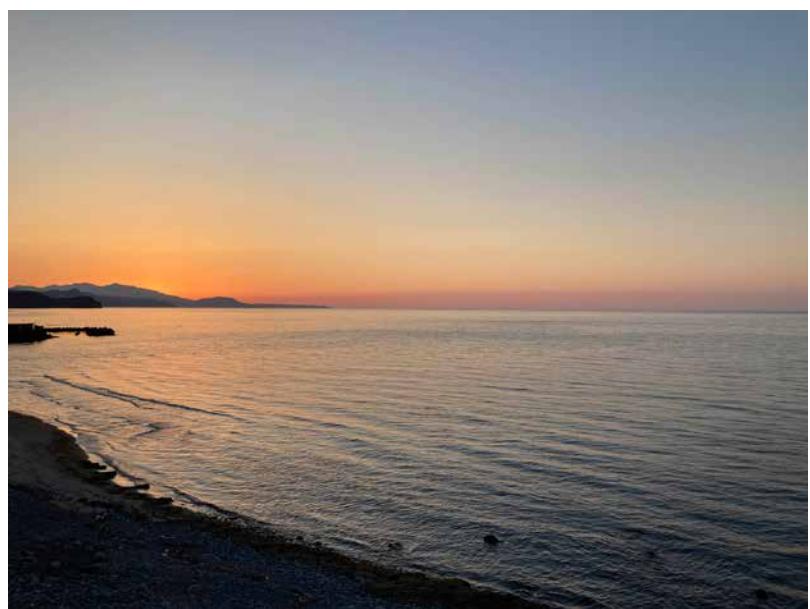
連綿と繋がってきた“記憶”そして“心”が必ず導いてくれるだ

がある。

“確かなもの”が私達二人を突き動かしていました。

京都の家は私たちを鍛磨し、目覚めさせる入り口だったのだ。

住まう人の心が豊かになるよう、心ある職人たちの手で産み出された。



小樽から仁木へ向かう道の海

完